研究主題

他者とともに編む

Ⅰ　研究主題設定の主旨

１　社会的・教育的な背景から

人口減少・少子高齢化、地球環境の有限性、生成 AI の出現・発展等、社会は様々な課題や急速な変化の中にある。社会の変化とともに、子供を取り巻く環境も大きく変化している。変化には、しなやかに対応できることが望ましいが、不登校児童生徒の増加、多様性の顕在化による教育的支援を要する子供の増加等、望ましいとは言いがたい形で影響が出ている。そんな中で、「子供が学校で学ぶとはどういうことか」、「学校教育の役割は何か」ということが問われている。

多様な背景をもつ子供が学ぶ学校において、上の問いに対する唯一の正解はないだろう。しかし、多様な背景をもつ子供どうしだからこそ、関わりを通して自分自身を成長させていくことは、「子供が学校で学ぶとはどういうことか」に対する解の一つとなるだろう。そして、「他者と関わり自己を成長させていく子供」が育つために働きかけることが、「学校教育の役割は何か」に対する解の一つだろう。

他者と関わり、その関わり自体によさを見いだすことができる子供は、自己肯定感や安心感を育みながら、しなやかに自己を成長させていく。その経験を日常の中で積み重ねていくことができる場として学校は存在するべきであり、その経験を積み重ねた子供は、他者との関わりを大切にしながら、自分らしく生きていくことができるのである。

２　本校のこれまでの研究との関連から

他者と関わることを説明する際には、一言で言い表せない多様さがある。それは、多様な子供どうしが関わるからである。そのため、「関わり」を代替するものとして、いろいろな行為を表す言葉が宛がわれる。その行為の一つに「対話すること」を挙げる。

本校は長年にわたって「対話」の研究を行ってきた。前研究「学び続ける子供を育てる授業の創造」では、主に一斉授業による協働的な学習の場面における対話に着目して研究を行った。その結果、子供は、自分にはなかった他者の考えにズレを感じたとき、対話を通して問いをつくったり、問いの解決へ向かったりすることが分かった。そして、対話によって問いを解決した子供は、自分の考えを再構築し、各教科の資質・能力を着実に身に付けていくことが分かった。この前研究の成果から、「他者と関わり自己を成長させていく子供」の様相を見ることができる。

一方で、さらに一人ひとりの子供に着目していくと、「対話したり、対話を通して考えを再構築したりする子供一人ひとりの内面では何が起きたのか、そこにはどのようなつながりがあったのか、それは実に多様であるが、その多様さに着目していくことは、さらなる子供理解につながり、そこから見いだされる教師の役割は、子供一人ひとりのさらなる成長につながるのではないか」という研究の可能性が見えてきた。

前研究の成果として、子供がズレを感じ、問いをつくり、解決を通して考えを再構築することが分かったが、では、ズレを感じたのはなぜか。自分にない他者の考えに出合えば、教室の全員が必ず一様にズレを感じていたというわけではない。そこには個々に何らかの心が動く要因があったはずである。その心の動きが一人ひとり多様なのであり、その要因を解明していくことで、他者と関わることの具体や、自己が成長することの具体が見えてくるのである。ここまで述べてきた通り、関わりは多様であるため、その多様さを含み、整理していくための言葉として「他者とともに編む」を用いる。

３　研究主題について

本研究主題を「他者とともに編む」として研究を進める。人は、異なる特性をもつ「他者」との関わりの中で、一人では気付かなかった考えや、自分とよく似た考えに出合うことで、自分の考えを見直したり、「やっぱりそうだ」と自信をもったり安心したりする。そして、子供は次の学びにおいて教材や他者、学び方等を選択し、自分にとって最適な学習になるよう調整していくのである。また、この過程は、資質・能力の育成や新たな価値の創造、よりよい人間関係の形成につながるのである。

先述の過程を、より精緻に見ていくと、子供の多様な関わりが見えてくるだろう。「編む」とは、関わりの具体的な行為や内面の働きの総称を指す。「他者とともに編む」は、「他者と対話する」、「他者と創る」、「他者と動く」、「他者と聴き合う」、「他者と悩む」、「他者を求める」、「他者を受け止める」、「他者を認める」などといった「行為」や「内面の働き」の面と、「資質・能力の育成」、「概念の更新」、「新たな価値の創造」等、編まれた「結果」の面があると考えられる。「他者とともに編む」子供は、他者と関わり、相互に影響し合いながら、内面の働きや行為によって、結果に向かっている子供である。ただし、内面の働きや行為と結果は不可分であり、例えば「対話しながら資質・能力が育まれていく」ということは十分に想定されることである。いろいろな言葉が宛がわれる「編む」であるが、「他者とともに」編んでいることが重要である。他者とともに編むことで、「友達と話してよかった」、「一緒に納得のいくものができた」等の素朴でありながら重要な感覚を積み重ねた子供は、自分らしさを表出し、自己を成長させていくのである。

Ⅱ　研究の目的と方法

１　研究の目的

本研究の目的は、他者と関わり、自己を成長させていく子供を育てることである。他者と関わり、自己を成長させていくことの具体を分析・考察するために「他者とともに編む」を用いて整理していく。「他者とともに編む」子供がどのような様相を見せるのか、その様相はどのような条件によるものなのかを明らかにする。

本研究主題を解明していくことで、子供同士が互いに思いやりを大切にしながら、より温かい人間関係を築いていくことができるようになるだろう。また、本研究で、教師の役割を追究していくことで、教師の伴走者として関わりの重要性が見えてくるだろう。「他者とともに編む」ことで、子供と子供、子供と教師の関係性が更新され、子供は安心感のある環境の中で自己を成長させていくことができるようになるのである。

２ 研究の方法

⑴副題の年次計画について

研究主題の解明に向けて、本研究を３年計画とし、以下のように副題を置く。

初年度	他者とともに編む子供の様相を探る
２年度	他者とともに編む子供の条件を探る
３年度	他者とともに編む子供の評価の方法を探る

初年度は、他者とともに編む子供の様相を探る。そのために、子供の「内面の働き」に着目する。「他者とともに編む」子供は内面が働く。つまり、自己の内面にある思考、感情、意識、直感等に何かしら動きが見られるのである。誰と、どのように関わることによって、どのような内面の働きを見せるのかを丁寧に見ていきたい。様相を見ていく中で、子供が他者とともに編むとき、教師のどのような手立てが有効だったのか、または、子供自身で編んでいったように見えたとしたら、どのような条件があったのかということについても明らかにしていく。

２年度は、他者とともに編む子供の条件を探る。初年度に明らかにされてきた様相をもとに共通項や、各教科、発達段階等による違いを見いだし、仮説を立てて検証していくこととする。

３年度は、他者とともに編む子供の評価の方法を探る。内面の働きや、編まれた結果等を可視化し評価する方法について検証していく。

年度ごとの副題に掲げたものは、それぞれの年度の重点として位置付けたものであり、必ずしもそれのみを研究対象としていくわけではない。３年間を通して、様相・条件・評価について研究を進めていく。

⑵研究の計画段階において

研究の計画段階では、研究主題について各教科でどのように考えるか、授業場面では、どのような様相になるのかを想定する。そのために、前研究の自分の実践を基にしつつ、「他者とともに編む」子供の様相を重ねて考える。その上で、各教員の問題意識を出発点に仮説をもって授業実践に臨み、そこから見えてくる個別具体的な子供の様相を分析、考察し、その中で共通する様相や条件を見いだしていく。

一人ひとりが先行研究や先行実践も参考にしながら、教材研究、教材解釈、資質・能力の育成や学び方の獲得等に根拠をもって追究し、研究主題の解明に努める。

⑶授業研究において

授業では、研究主題に対する多様な子供の様相を、教師一人ひとりの価値観や経験に基づいた見方・考え方を働かせながら丁寧に見取っていく。その際、明確に変容した子供のみを取り上げて因果を見るだけでなく、明確な変容が見えない子供や、多くの発言が見られたもののスッキリしない思いをもった子供の様相にも着目し、どのような内面の働きがあったのか、その内面の働きには教師のどのような手立てや学習上の諸条件が関わっていたのかを分析し、考察する。

協議会では、見取ったことを交流し、共通する子供の様相や手立てを見いだし、価値付ける。

授業を見る段階としては、大きく分けて以下の三段階が考えられる。

① 他者とともに編む前の段階
② 他者とともに編む段階
③ 他者とともに編んだ結果、自分らしさを見せる段階

上記の三段階について、教師の意図的な手立てを中心に見取っていく。ただし、子供の様相は教師の意図しないことが影響して現れることもある。無意図的なことのつながりについても丁寧に見取っていくことで、新たな条件を見いだすこともできる。様々な可能性を捨象されないようにすることが重要である。

⑷学びの相似形

令和４年度答申「『令和の日本型学校教育』を担う 教師の養成・採用・研修等の在り方について ～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を 有する質の高い教職員集団の形成～」では、「4.(1)『新たな教師な学びの姿』の実現」の項で以下のように述べられている。

個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、「主体的・対話的で深い学び」 を実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにも求められる命題で あ

る。つまり、教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形であるといえる。

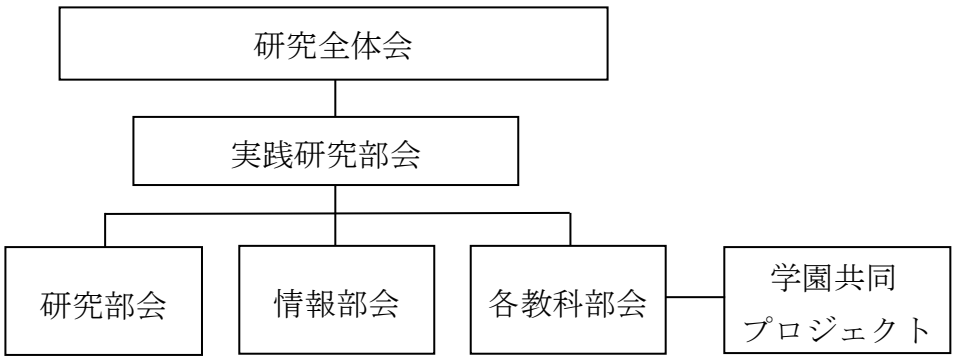
研究主題の解明に向けて、教師自身も他者と関わる中で、「編む」とはどういうことかを捉えていこうとするのである。子供の学びと教師の学びは相似的なものであると認識し、教師自らが問題をもち、「他者とともに編む」ことによって研究を深め、「自分らしさ」を見いだしていく。

Ⅲ　研究推進のための主な日程と組織

１　研究の日程

R7　５月 ～７月	実践研究	研究主題の解明に向けての研究授業（全員） 全体研修会
７月	研究全体会	実践研究の報告
９月 ～１０月	研究概要の整理	
11 月	教育研究発表会	
12 月	研究全体会	教育研究発表会の反省 今後の研究方針の検討
１月 ～３月	研究のまとめ・研究計画の検討	

２　授業研究の組織



【引用・参考文献】

中央教育審議会.“『令和の日本型学校教育』を担う　教師の養成・採用・研修等の在り方について　～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を　有する質の高い教職員集団の形成～（答申）”.文部科学省. 2022-12-19. https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt_kyoikujinzai01-1412985_00004-1.pdf, (参照 2025-01-22)